

私達の教育改革通信

第 152 号 2011 / 4

教育通信ホームページ

<http://www.easy-db.net/unno/kyouiku/>

先事館制作室 : 進士多佳子 〒 106 - 0032 港区六本木 7-3-8 ヒルプラザ 910

発行人 : 西村秀美 , 先事館箕面 〒 562-0023 箕面市粟生間谷西 3-15-12

お願い: 教育通信はオープンメディアに移行します。 A(購読) 会員、運営に参画される B(協力) 会員及び C(編集) 会員になる

子どもたちのために

脱原発による復興を!

佐々木

聖

「正常化の偏見」ではないのか?

3月31日現在、福島第1原発の状況は「タービン建屋内外に大量にある汚染水の除去に手間取り、本格的な冷却機能を取り戻すための作業は再開の見通しすらたっていない」(日本経済新聞ウェブ版同日付)。高濃度の汚染環境で困難な作業を続けている方々の文字通り決死の覚悟、そして避難生活を強いられている東北の方々に二重にふりかかる苦難を思うと、もはや言葉もない。

冷却のための注水→放射能汚染水の屋内外への流出→汚染水の回収処理。この泥縄作業を延々と繰り返すしかないのか。その上さらに、高濃度に汚染された環境で、ポンプや配管などの破損をひとつひとつチェックし、冷温停止まで持っていけるのに果たしていつまでかかるのか、数か月か1年以上なのか、専門家でも予測はつかない。しかもその間、炉心溶融→圧力容器の底抜け→原子炉建屋のたまり水と反応して水蒸気爆発→制御不能→作業員全員退避→複数機爆発、という最悪の事態に至らないという保障もどこにもない。

ただし一つだけ、残念ながら誰にも否定できない確実なことがある。この間に放射性物質が大気中、海洋中、土壌中に放出され続ける、ということだ。

方を歓迎します。 B 会員には自己負担でコピーと友人への配布、 C 会員にはそれに加えて編集を輪番でお願いします。私達の教育通信が今後どう発展するか、この皆で育てる新方式がよい日本文化に成長することが望まれます。

編集 : : 先事館吉祥寺 海野和二郎 180-0003 武蔵野吉祥寺南 4-15-12 ;

先事館狭山、菅野礼司 〒 589-0022 大阪狭山市西山台 1 - 24 - 5 ;

先事館近大理工総研 湯浅学・川東龍夫 〒 577-8502 東大阪市小若江

先事館京都教育大 岡本正志 〒 612-8582 京都市伏見区深草藤森町 1

先事館聖徳大学 茂木和行 165-0035 中野区白鷺 2-13-3-409

3・11以来、政府行政・東京電力幹部広報・マスコミ(特に地上波テレビ)には全く失望している。以上述べたようなことは、素人にもわかる「いまここにある危機」だ。当然ながら、その危機を真正面から見据え、最悪の事態を想定した回避策を講じておくのが、まともな判断力をもつ大人がすることだろう。しかし、マスコミも含めた当事者たちの言動を見ている限り、「いまここにある危機」をないことにしよう、という力学が働いているとしか思えない。それどころか、「最悪の事態」などと口走ると「不安を煽るな」「パニックを起こすつもりか」とバッシングされかねないありさまなのが不気味だ。

「ただちに人体に影響ないレベル」の大本営発表を鵜呑みにし、「「原発」で食べている専門家」だけ登場させる地上派テレビ。いつまで「まだ大丈夫」「まだ安心」と言い続けるのか。見ているがよい、彼らはそのうち口をつぐむだろう。取り返しのつかない時期になって「大丈夫と言ったじゃないか!」と詰め寄っても遅いのだ。それこそ手のつけられないパニックが起こる。

専門家が体内被曝のリスクを未解明の部分も含めて正確に解説し、それに対して適切な質問を投げかける地上派テレビを見たことがない。放射性物質は同心円状に飛散するわけではないから風下の地域の警戒を促すべきで、気象庁はスパコンを使ってシミュレーションし、「本日の放射性物質飛散情報」を常時テレビで流し続けなければならないと思うが、

その兆しさえない。のんきに天気予報で「本日の花粉情報」がいつものように繰り返されるだけだ。今ほど、インターネットがあって良かった、とつくづく思ったことはない。

なぜこうなっているのか。理由は二つある。一つはいまだに私たちが「原発安全神話」の虚構の中に生きているからだ。今回の件で初めて知ったのだが（これが知らされていなかったということがまた恐ろしい）、この国は「原発を推進する人々」と「原発を監視する人々」がダブっているという、世界でも例をみない不可思議な原発行政を推進している国なのだ。橋本行革のときに科学技術庁を廃止して原発利権を取り上げ、経済産業省に一本化した。それでできたのが原子力安全・保安院で、元からあった監視側の原子力安全委員会は有名無実化した。まあ、実は元からダブっていたわけだが、少なくともこれで日本最大の利権集団としての「産官学複合体」別名「原子カムラ」の鉄のトライアングルは、いっそう強固なものになったのではあるまいか。今どき最も安定したスポンサーである電力会社に抗えるマスコミはなく「日本の原発は世界一安全」のプロパガンダはまんまと功を奏し、私たちは完全に信じこまされてきた。

4年前に福島原発の今起こっている事態をまさに危惧して安全基準や保守点検の見直しを求めた福島県議がいて、東京電力の回答が「今のままで安全だから大丈夫」だったことなど、知っている人がどれだけいただろうか。この事故は決して「想定外」ではない。すでに14年前、神戸大学の地震学者石橋克彦氏によって「恐ろしいほどの正確さで想定されていたのだ。石橋氏はその後も警鐘を鳴らし続け、05年には衆院の公聴会でも同様の警告を発している」（毎日新聞ウェブ版「発信箱」3月29日付）が、鉄のトライアングルはこれを無視した。

もう一つの理由。これは簡単だ。先ほど延べた「今ここにある危機をないことにしよう」とする心理。言い換えれば「深刻な事態が起こっても自分だけは大丈夫と思ひこみたい」心理。これは心理学用語で「正常化の偏見」というらしい。かつて防災ジャーナリストの渡辺実氏を取材したときに教えても

らった。この「正常化の偏見」が震災予防では最大の障壁になるという。進行中の危機に対してもこの心理は働くのだろう。人間、いやなことは見たくないもの。しかしその結果は、いつのまにか茹でガエルになって死んでいくのだ。

東北・首都圏の母親と子どもたち、妊娠中の女性は、じわじわと西日本に避難し始めている。先週の京都出張で多数目撃した。当然の行動だと思う。政府とマスコミが信用できなければ、子どもの生命と安全を守るのは一人ひとりの大人の責任だ。後で「取り越し苦労のおっちょこちょい」と笑われるなら、むしろ幸いではないか。そうでなかった時の不幸とは比べものにならない。

進むべき道はひとつしかない

そうなることを祈るしかないが、現場の英雄たち（東京電力は解体してほしいが彼らには一生の保障を与えるべきだろう）によって今の危機が一日も早く回避され、私たちが「正常化の偏見」から脱し「原発安全神話」の甘い夢から覚めたとして、という大前提でここからの話を始めたい。

結論はいたってシンプルだ。どこからどう考えても、この国は現在稼働中の原発54機全面停止、そして廃炉へ向けて一丸となるしかない。「脱原発」こそ合理的な選択といえる理由は三つ。第一に、何よりも未来ある子どもたちのために。第二に、直下型大地震が日本列島の至るところで起こる恐れが高まっていること。第三に、自然エネルギーと従来の化石燃料のベストミックスにより、原発がなくても電力需要を賄える可能性が出てきたこと。

放射線障害で最も甚大な被害を受けるのは育ち盛りの子どもたちだ。チェルノブイリ原発では体内被曝による乳幼児の甲状腺癌が多発した。大人たちはもういい。「原発大国」になることを（知らず知らずの上とはいえ）選択し、電力をガンガン使って生活を享受してきたのだから、そのツケが十年後か三十年後か知らないが、白血病や癌となって表われたとしたって、因果関係は誰も立証できないし、もはや寿命と覚悟するかしないだろう。しかし、何も知らない未来ある子どもたちにとって、それではあまりにも残酷ではないか。「そんな残酷な事態を引き

起こさないように万全の安全対策を講じている」という嘘が今回明らかになったのに、その嘘を信じ続けるのは愚かを通り越して犯罪に近い。少なくとも子どもたちを預かる教育関係者には断固とした態度を望みたい。

第二の理由については、もはや言うまでもないだろう。地震学者の一致した見解とあってよい。それどころか内閣府が2003年に被害のシミュレーションを出している（が東海直下型大地震で浜岡原発がアウトになった想定はしていない）。福島第1原発のみならず、日本の原発はほぼ「後期高齢者」の段階に入っている。「ほぼ全域が大地震の静穏期を終えて活動期に入りつつある」（石橋克彦氏の05年衆院公聴会での発言）日本列島の上に、そんなセコハンが54機もあるのだ。今回の事態を経験した上でもまだ安全と言い張る人に根拠を問いたい。

第三の理由は、ひと昔前なら原発推進派から一笑に付されていたことだ。百万回繰り返されてきたおなじみのセリフ「原発やめたらたちまち電力逼迫、自然エネルギーなんてコストが合わない」。しかしこれもまた「ためにする嘘」であることが、もはや実証されているといってもよい。NPO法人環境エネルギー政策研究所の飯田哲也所長のウェブサイトでの発言から引用する。

「フランスの試算では、仮に原発の災害リスクを保険料として上乗せした場合の電気料金は現行の3倍になるという結果もあります。（中略）『原子力発電はコスト高』が正しい認識でしょう。一方で自然エネルギーのコストは、導入が増えるにしたがって年10%の割合で下がっています。電気料金と同等のコストになる『グリッド・パリティ』は目前です。今や問題は『既存のエネルギーか、自然エネルギーか』ではなく『自然エネルギーをどう普及させるか』にあります。これまで続いた電力会社のエネルギー独占と、その裏返しにある、エネルギーを他人任せにする国民の態度は改められるべきです。（中略）地域でエネルギーを自給自足するという閉じた話ではなく、セルとしての地域が無数につながった『エネルギーのネットワーク』に方向性があります。無数のセルで結ばれたネットワークは冗長性があり、

強いのです」（@nifty ココロログ [地球のココロ「3・11以後、日本のエネルギーはどうなる？」](#) 3月30日付）

鉄のトライアングルの既得権益を守り続け、巨大地震のリスクと背中合わせで茹でガエルになるのか。全く新しいエネルギーのプラットフォームづくりを通じて復興需要を喚起し、子どもたちの未来に希望を抱かせるのか。この国はまさにいま岐路に立たされているが、進むべき道は誰の目にも明らかだ。

【焼畑の神を祀れ】

／グーテンベルク炭書／文明の始原へ向けて

齋島庸二（画家・編

集者）

【えっ！焼き物？】私は6年ほど前から、本を炭に焼く焚書ならぬ炭書、というアートプロジェクト「グーテンベルク炭書／文明の始原へ向けて」というテーマを軸に、本を文字通り炭に焼いては、かなり積極的に展覧会をし、また幾つかのメディアにも発表してきました。

今回はその中の一つ、『焼き畑の神を祀れ』という個展（2009年やきもの新感覚シリーズ6th／齋島庸二展 [清らかな炭化のかたち] 常滑 INAX ライブミュージアム）をご紹介します。

この美術館は、ご存知のINAXという衛生陶器ないしはタイルメーカーを母体とする美術館であることから、やきもの（陶芸）の新しい表現に挑戦する作家を紹介する活動を続けてきたが、わたしの「グーテンベルク炭書」という仕事が、それは、本を炭に焼くーやきもの、という評価を得てのことでした。わたしは今まで、自分の「炭書」という表現を“やきもの” と思ったことは一度もなかったもので、そのオファーにこめられたキュレーターの自由な視点／読み替えに、一瞬、虚をつかれたような刺激を受けたのです。「そーか、やきものか！」という驚き。そしてすぐさま、そうであるならば、わたしも“土を焼くやきもの” という文脈はそのまま、 “陶器を焼く「土」” から、一挙に石器時代の、原始農耕における「焼き畑」によって焼かれるべき「土」、へと捉え返すことにしたのです。

もともとわたしの炭書は、本を炭に焼いてしまうわけですから、そこにあったテキスト／情報は、すべて失われてしまいます。そのかわりに、この場合では「焼き畑農耕」という想像上のテキストを作品化しようとするものです。

【作品の構造】 作品はまず、単行本／全集などを、5～10冊ほど、麻縄で束ねて、今回はその塊を60個ほど、青森県の深浦という日本海側の町に、岩谷義弘さんの経営する炭工房「勘」という、環境に特化した炭を焼く工房があって、そこに送って焼いてもらうのです。本には紙を始め印刷インクやコーティング剤などが含まれていますから、それを焼くときに出るかもしれぬ排ガス類を安全に処理する能力を備えた炭焼き窯が必要なのです。

次に、炭書一つ宛に1～3本宛の試験管を別に用意して、そこに土を入れて、焼き畑農耕の栽培植物であるヒエやエゴマ、粟、ソバ、陸稲、蕪の種などを播き、発芽させる。その上でこの現代的子宮である、いわば試験管ベビーを、炭化した本の塊に埋め込み、オブジェ全体を蜜蝋で包み、焼き畑農耕の山の女神に捧げる供物／予祝とし、また一方で、おなじく現代的子宮である試験管を、いけばなの、壺を始めとする花器に見立て、炭書のオブジェに埋め込み、こちらには水を入れて、そこに縄文の有意植物である栗の枝やブナ、楠、うばめがしの枝を挿して、これは山の女神の依り代に見立て、祀りの場のしつらえとしました。

【もう一つの土／どろだんご】 ところであなたは、子どものころ「どろだんご」という遊びを経験したことがおありでしょうか。水を加えた柔らかい土をおにぎりのように手のひらで転がしながらボールのように、なるべく真球に近くなるまで転がして固めてゆく遊び。この美術館にはなんと「土・どろだんご館」というものがある、このどろだんご遊びのワークショップが常に開かれているのです。それが大人気で、2006年10月の開館以来、今までに6万7千人が体験しているというのです。

みんな夢中で憑かれたようになって、まるめればまるめてゆくほど、なぜか水分が少しずつ抜けてゆき、なぜかわからないけれど、カチンカチンに、ま

るで撞球の球のように、それは美しいものに仕上がってゆくのです。まったく不思議です。やがて掌（てのひら）は、もう一枚皮膚が生えたかと思えるほどに、巾ったい、それは無感覚状態にちかく、あるいは掌のだんごが自分と化し、自分の掌で自分をまるめ、転がしている自分、といった感覚。微かに熱発する掌。月並みですがまさに「遊びをせんとや、生まれけむ」なのだし、またそこにホモ・ルーデンスとしての人間の本来の姿をみることも、もちろんアリなのですが、私の子どもじぶんとは違って、土そのものが疎外され均質化されてしまった日常のなかで経験する、かなり切実な遊び、なのです。

しかしこれを「あそび」というのなら、「焼き畑農耕」とか「やきもの」といった生産形態の土の、もつともつと根源によこたわる「土」のもつ自然情報と、それと交叉する言語情報、そこに人間自身が持つ、遺伝子とか細胞とかいう生物的信息、あるいはそれら一切を包む、その“時”の持つ宇宙／地球情報とが掌の上で出会う、まことに希有な一点に起こったひとつの、言語由来の情報観を超えた、あるいは揚棄したところの、それは「あそび」であり、更にはどろだんご作りもわたしの炭書も、その一点に立ち会うべく願いを込めた、人間的なささやかな投企に他ならないのです。

【言語由来の情報観からの旅立ち】 本を炭に焼く一—15世紀の大発明である活版印刷術、その生み出す膨大な本というメディアは、今やIT革命とか、電子本などへと、主役の座を明け渡そうとしながらも、長年にわたり地球にそなわる熱代謝のキャパシティを遙かに超えるまでに豊度を、自分たちの土地に求め続けてきた現代の資本主義農業。そのはてにエコロジーという、いまだかつてない眼鏡をかけた自然と向き合い、そこに命を繋ぐというハメになった人間。を、羽交い締め抱え込んできた情報という怪物。

しかしいまや、アリストテレス流に言えばプシュケーの、それは人間ばかりでなく、植物にも石にも水にも、つまり、わたしとわたしたちを囲むすべての、有機も無機も、さらに政治も経済も、戦争さえもまた、自然／宇宙という巨大な情報システムに、

没入的に組み込まれて、その極限にまで知の豊度を増したこの文明の言語情報と、宇宙／地球の自然情報との乖離あるいは不均衡の極限のところのうち建てられた現代のバベル。――昨年炎暑の8月、パリ在住の作家ジョナサン・シモニーと私は、そんな気持ちを [DYSTOPIA] (2010年8月30日～9月11日銀座 Art Live) というテーマに託し、2人展をしましたが、今回の3.11という大震災は、もっとも悲劇的な形で惹き起こされた、バベルの崩壊、ではなく、まさにメルトダウンの、あるいはその発端に、私たちはどうやら立ち会うことになったようです。

そして実は、私の炭書――焼かれることで、すでに本ともいえない、ただの物質としての炭の本に、この世界のバベルとしてのコミュニケーションの不可能性を負わせると同時に、実はもう一つ、吸収浄化能力をもつ炭という一つの陰圧の物質に転成させることで、少々口幅ったいようですが、些かの「希望」として、世界／地球という箱に、仕舞っておきたかったのです。なんだか少しおセンチですね。

(おわり)

団塊世代は逃げ切れるか

――「デフレの正体」を読んで

金

澤一輝

「デフレの正体」という本

現役の銀行マン（藻谷浩介氏）が書いた「デフレの正体」（角川ONEテーマ21新書：2010）という日本経済を分析した本が読まれている。2011年3月現在、50万部をこえたというから、経済書にしては異例の売れ行きと言える。読まれた方も多いだろうが、概要は次のとおりである。――1950年、50百万人であった日本の生産年齢人口（≒現役世代）は、1995年に87百万人というピークをつけた後、2005年84百万人、2015年77百万人と急激に下降しつつある。このような状況下、日本経済は、生産年齢人口減→クルマ、家電、住宅などの現役世代中心の消費減→供給過剰→価格下落→企業業績悪化→雇用減少→所得減→いっそうの内需減という悪循環に苦しんでいる。

このような中では、たとえ景気が回復しても内需は縮小し続ける。従来の経済や景気の見方や諸対策はほとんど有効ではない。経済を動かすのは、景気の波ではなく、人口の波、つまり生産年齢人口の数の増減であり、従来の経済や景気の見方や諸対策はほとんど有効ではない。現在の事態に対しては、従来型発想での公共事業・成長維持政策・インフレ誘導・ものづくり技術革新・生産性向上・外国人労働者の受け入れなどの諸策も実効性に欠ける。やるべきは、とにかく「社会の中堅層の所得の1・4倍化を実現にして個人消費総額を維持すること」であり、具体的には「企業は、若手・中堅社員の給料アップを団塊世代の退職で浮いてくる人件費総額の中で実現すること」、「制度的には、消費しようとしないう富裕高齢層から、収入が増えれば確実に消費する若年・中堅層への所得移転を大々的に進めるため生前贈与誘導などあの手のこの手の政策を考える」ことである。とにかくこれまで言われてきた日本経済の復活のためには、景気回復、成長回復が絶対必要であるという通説・常識に冷水を浴びせかけ、消費人口減少に焦点を当てた対策が急務であることを訴えたところが、「目からうろこが落ちた」という評判を呼んでいると思われる。

高校クラス会の仲間に見る住みかと豊かさ

筆者の年齢（1944年生）からすると、この本の「消費をしようとしないう高齢層」がどうしても気になる。これは本当だろうか。筆者の周囲を見て、実感的に検証してみよう。それには、より一般的という意味で、大学より東京に住む高校のクラスメートの方がよい。いつもクラス会に集まる十人を見てみる。広義の団塊世代である、地方出身者である、学歴は大卒、元の職業は公務員または大～中企業のサラリーマンである、大体2人の子持ちである、今は大半がリタイアしている、ということで間違いなく「ある階層」を代表していると言えるだろう。我々は関西のある地方から出てきているが、大体が40歳代の後半で自宅を保有した。やや遅いが、転勤を重ねて、東京に一応落ち着いたのはその年代なのだ。サラリーマンにとってやはり家を買うことは一大事業であるが、地方出身者にとっては特にそう言える。

通勤距離、土地柄、価格、融資条件、みなそれぞれに苦労話を持っている。その苦労が実感できるのはたとえばクラス会がお開きになって別れる時だ。十人の帰る方向が見事にばらばらなのである。藤沢、東戸塚、厚木（神奈川）、田無、稲城（東京）、越谷（埼玉）、津田沼、印西（千葉）、取手（茨城）、ひとりは静岡の藤枝。都心には誰も住まず、みながみな、戦後開発された新興住宅地——膨張した東京の外周部、おそらく昔は雑木林か畑かという土地を苦労して手に入れて住んでいる。

地方から出てきた高校のクラスメート全員が、東京の郊外に持ち家（たまたまだがみな一戸建て）を持った。筆者が知る限り、金持ちの息子はいない、みな自分の力で建てた。考えてみれば、各人の精励恪勤の成果だろうが、そういうことが出来た時代環境だったのだ。リタイア後の生活は海外旅行や何やら、年金生活者だが悠々自適に見える。こういうことは過去の時代にあっただろうか。団塊世代、けっこう働いた覚えはあるが、戦後中流社会からの見返りも恩恵もたっぷりあったと言うべきではないか。藻谷氏に「富裕高齢層」と一括されても仕方がないと言えそうだ。クラス会が終わり、みなと別れる都心の雑踏の中で、この幸福＝豊かさは一体いつまで保てるのか、戦後成長の果実の享受はいつまで可能なのか、ずばり我々をふくめ1800万人の団塊世代は逃げ切れるのかということを感じないわけにはいかない。それは、たちまち著者の問題提起に直結する。

「団塊の世代」に意味はあるのだろうか

「デフレの正体」は日本の富裕高齢層に対する強制執行の予告のような本だ。そしてそのターゲットが団塊世代にあることは明らかだ。日本の財政危機が国際的環境から本格化するの、狭義の団塊世代が年金受給者になる2012年ごろからと言われたが、今回の大震災でそれは早まったと見るべきだろう。ここで団塊世代というあいまいな集団が何を意味するかを見ておこう。

●狭義の「団塊の世代」は1946年から1950年までの5年間に生まれた者約1千万人とされる。山口文憲「団塊ひとりぼっち」によれば、この世代は、①旧体制の崩壊後、新しい価値と社会システムが誕生す

る潮目に生まれている、②しかし、旧体制下で人となった父母や教師に育てられたため、新しい価値に順応しながらも、一方では旧世界の慣習や文化とも親しんでいる、③従って純戦後生まれだが、その後の世代ほど内面世界は平坦・直線的ではなく、起伏・屈折・陰影がある、という特徴があるという。この点から考えると、筆者ら1944年生まれも純戦後産ではないが、この特徴①②には一致する。ざっくりの私見では、戦前の記憶がほとんどない、具体的には1941年生まれ以降の者は、大きくこの「団塊世代」に括ってよいと考える。逆に下は同じような時代背景で括れるという意味では、1950年生まれくらいまでがギリギリではないだろうか。その後の世代は、新しい価値や社会システムがほぼ確立した中で育った。彼らは、1956年の経済白書が「もはや戦後ではない」と断じた時代に生を享けており、TVや電化製品、自動車などがもはや珍しいものではなくなった世代だ。従って、広義の「団塊世代」は1941年前後から1950年前後に生まれた日本人約1800万人ということになる。

●しかし、「同世代」という意味を、“同じ時代に育ち、同じような考え方、感じ方を持つ世代”とするのは間違いの元である。前記した山口の定義でも、③のとらえ方は実にあいまいで疑問と言わざるを得ない。その定義に従って、たとえば、その後の世代の内面世界が平坦で、団塊世代の方が陰影に富んでいるなどとはとうてい言えない。そもそも狭義の1000万人にしる、広義の1800万人にしる、そんな超巨大な集団が同じような価値観を持つと考える方がおかしい。団塊世代が戦後教育の影響をいちじるしく受け、その流れの中で大学に入って多くの者が「全共闘世代」になったというような俗耳に入りやすい言説も明らかに間違いである。山口の本でも示されるように、1966年頃、大半の日本人は高校卒までで就職し、世の中に出た。当時の大学進学率は短大含めて16%と実にわずかである。また当時の大学生も大方はノンポリ、一般学生で、激しい全共闘の運動に参加したものは大目に見て2～3割、そうすると全共闘といっても全国の同一世代の4～5%しかない。そのような小さな部分で当時の世代を

代表させられるとはとうてい言えないであろう。団塊世代の中核は、むしろ中卒、高卒の人々で、藻谷の言う「生産年齢人口」の中に早期に加わったというのが正解であろう。あるいは、団塊世代を、「ビートルズ世代」などと文化的側面を強調する向きもある。しかし、これも東映任侠映画や演歌やグループサウンズも大流行していたから一面的すぎる。団塊世代（特に後期）が、ジーンズ、長髪、ギター、マンガなどに親しんだのは事実であるが、それはファッション、流行であり、何か特別な文化が日本の社会に生まれたわけではない。

●「団塊世代」とは、1976年に堺屋太一が言いだし、マスコミが飛びついた絶妙のネーミングである。山口の本が指摘するように、それは「巨大な消費市場／消費者集団」というのが経済的、社会的実相に近い。そこに、格別の政治的、社会的、文化的世代集団という意味づけをしようとしても、結局は無意味に終わる。それはほとんど後講釈の類である。山口は、「この世代の根っこは思想でもなければファッションでもない。結局モノなのである。商品なのである。団塊世代は、高度成長とともにおとずれたこの国の消費文化の第一世代だと言われる。モノの中で成長し、消費の中で人となった初めての日本人である」と書くが、正鵠を得ている。単なる巨大な消費者集団だと解すれば、この集団が経済の中ではモータリ・サラリーマンという勤勉な労働者に転換して生産と消費を支え、政治的には長く自民党を支え、のちに民主党へ移る気まぐれな無党派となったりするのも道理ではないか。

団塊の世代は逃げ切れない——格差是正のまっとうな圧力

藻谷の「デフレの正体」がここまで読まれたのは、第1に「経済を動かすのは、景気の波などではなく、人口の波、つまり生産年齢人口＝現役世代の増減につくる」という主張が斬新でインパクトがあったこと、第2に生産年齢人口からはみ出た高齢層（特に富裕高齢層）の持つ富を若年層に所得移転する＝再配分の必要性を強調し、そのための具体論を提示したこと、この2点である。前者が新しい観点であるが、後者は現在さまざま提案されている方法論の一

つである。このように世代間格差の存在を認め、富裕高齢層から若年層への所得移転を主張する論者は、いま急激に増えていると言ってよいだろう。ほとんどの見直し論者が、前提として日本の世代間格差は主要国で最悪で、到底放置できないところまできたと主張する。失われた20年からの慢性不況が、大卒の内定率や若者の失業率を悪化させているという背景もあるだろう。昨夏以来、民主党政権も野党もメディアも消費税論議を解禁したこともある。財務省の思惑もある。そしてターゲットは団塊世代だ。来年（2012年）に、もっとも狭義の団塊世代（1947年生）が65歳になるという事情もある。

もういいとこ取りも逃げ切りも許されないということだろう。しかし、議論の基本は世代間格差があまりにも露骨に明らかになってきて、誰もがこの議論を避けて通れなくなってきたことにある。この先、年寄りが相対的にますます富み、若者が相対的にさらに貧窮化する可能性図式が誰でも簡単に描けるようになってきたからだ。世代ごとに総受益額マイナス総負担額＝純受益額をはじき出すシミュレーションはどこでもやられているが、大体60歳以上（＋4800万円）と20歳代（－1700万円）との差は6500万円とされている（「世代間格差ってなんだ」（城茂幸他））。計算の仕方では8千万、9千万という差になる。こういう算出例や見直し議論はますます頻繁になるだろう。対応策のメニューも大体出揃ってきている。①世代間公平基本法の制定、②社会保障額（年金給付）削減と支給年齢の引き上げ、③高齢者医療制度の再見直し、④消費税アップ（20%にアップが普通）、⑤退職金優遇税制の見直し、⑥生前贈与増進・無利子国債発行などの新しい工夫、⑦2%程度のマイルドなインフレ実現などだ。

「成長幻想」脱却の時——「デフレの正体」の功績

シルバー・デモクラシー、すなわち結局は年寄りの言い分がまかり通る政治が横行してきたことへの反発もある。世代間格差のささやかな是正策でもあった後期高齢者医療費問題の処理などはシルバー・デモクラシーの典型であったし、メディアもそういう年寄りの身勝手な言い分により多くのスペースを割いてきた。「デフレの正体」はそういう傾向に対

して、論理の建て方を可能な限り単純明快にして、経済成長すれば老若ともに救われるといった議論への逃げ道をふさいだという点に最大の功績があるように思う。世代間格差の具体額に諸説あるのは、経済成長をどの程度前提にするかの差があるからだ。つまり、藻谷のような身も蓋もない議論をすれば、マイナス成長かゼロ成長を前提とするため、制度論としてはギリギリの議論に行かざるを得ないのである。その意味では菅首相が「社会保障と税の一体改革」と言っているのはまったく正しい。多くの経済学者が積極的には藻谷の本を評価しないようだ。しかし、それは銀行員に神聖なマクロ成長理論領域を荒らされたという職業的嫌悪感に過ぎず、おそらく今後の展開は藻谷流の方向しかないと思われる。

さらに言えば、我々市民レベルでも、長年慣れ親しんだ、経済成長に期待する心的傾向から脱却するしかないだろう。少子化、人口減少、ゼロまたはマイナス成長という現実を正視し、それならば想定されるリスクをどうしたら最小限化するか、あるいは人口減少社会をむしろ良きものと認め、思いきったデザインをどのように描くか、といった議論を始めていくしかないのではないか。つまり、マイナス成長と新制度設計という非対称を甘受することからすべて始まるのではないかと考える。団塊の世代は、その壮大な実験室に行かなければならないだろう。今回の大地震が、その流れを強めることはあっても弱めるものにはならないだろう。

(参考文献)

「デフレの正体」(藻谷浩介：角川Oneテーマ21：2010)

「団塊ひとりぼっち」(山口文憲：文春新書：2006)

「世代間格差ってなんだ」(城繁幸・小黒一正ほか：PHP新書：2010)

「人口減少社会の設計」(松谷明彦ほか：中公新書：2002)

未来と繋がるある方法 No.2 “はちどりの一滴”

富良野の森から西目小学校へ

2000年から環境サイト「エコビーイング」の編集に携わるようになり、今年で12年目に突入しました。その間に世界は大きく様変わりし、環境に配慮する生活スタイルやソリューションを紹介するという当初のスタンスはすでに存在理由を失い、現在は環境問題をどのように捉えるかという有識者の視座を紹介するサイトへとシフトしました。さて、今や私たち日本人の生活に浸透した“エコ”感覚は間違いなく、先進国の中でもトップレベルにあると言えるでしょう。資源ゴミの緻密な分別や専用ゴミ箱の設置など、国民全体が自然になんとなくやっているエコ行動をリストアップしたら、かなりの項目が上がるはずです。

ただ、今回の東日本大震災を当事者のひとりとして軽微ながらも体験して以来、自分たちのエコ行動について原点から考え直す日々を過ごしています。

2006年6月、“五感が目覚める森の時間”というエコビーイングの特別企画の下、富良野に居を置く倉本聰さんが主宰する富良野自然塾取材しました。脚本家として国民的な作品を世に送り出してきた倉本さんが語られるさまざまなテーマはどれも心に響き、理にかなったものばかりでした。「僕は森をつくっているんじゃないで、酸素を生み出してくれる葉っぱを作っている」という言葉から始まったそのインタビューの展開は自分の生活を支える全ての要素をゼロから自分の力で確保するという覚悟で貫かれていました。つまり、欲しいモノやコトの価値を査定し、その対価である“お金”を支払えば、何でも手に入れられる物質主義と経済優先社会への痛烈な批判と、その対極に位置する自身の生活を愚直なまでに律するストイックな姿勢でした。

そして昨年、2010年11月、北海道という場所と彼の関係性を再確認するべく、富良野に戻りました。雪に覆われた富良野は前回の初夏の印象とは全く異なる、まさに「北の国」でした。そこで彼が口にしたのは「ハチドリの一滴」の物語でした。

エクアドルにこんな民話があります。山全体が炎に包まれるような山火事が起こり、多くの動物が避

難していた。しかし、小さなハチドリだけが残り、近くの川を往復し、火事を消そうと一滴の水をせつせと運んでいた。避難する大きな動物たちはそんなハチドリに向かって、「君がそんなことをしたって無駄だってことが分からないのかい？ 君が運べるような一滴の水なんかでこの山火事は消えやしないに決まっているじゃないか！」と笑うんです。しかし、ハチドリは彼らに向かって静かにこう答えた。「僕ができることは確かにこれだけ。でも、僕は今、自分のできることをやる」と。

冬の富良野での倉本さんのインタビューは「酸素を呼吸し、水を飲み、食事をする。この基本的なことをありがたいと感じ、その素晴らしさに感動できれば、地球を自分のこととして受け入れることができる」というメッセージで締めくくられたのです。

2011年2月23日、私は由利本荘市立西目小学校へ日帰りの取材のため、初めての秋田へ向かいました。盛岡以西北、単線の在来線に入ると新幹線の車窓の景色は一挙に変わり、日本の原風景とも言える白い雪景色が延々と続きます。片道五時間、列車と車を乗り継いで到着した西目小学校は、工藤校長のイニシアティブの下全校で倉本さんが話して下さった民話にヒントを得た「ハチドリのポトリ運動」を展開していたのです。放課後の教室に特別に集まってくれた子どもたちは自分たちが日々実行している“地球と共に生きるためのポトリ”を実に伸びやかに話してくれました。

(<http://www.ecobeing.net/>)

2011年3月11日、東北と関東地方を未曾有の大地震と巨大津波が襲いました。さらに現在、それによって引き起された福島原発の損傷による放射能汚染の不安に私たちは晒されています。自然災害だけならまだしも、自然を甘く見た人間の防災システム、そして“地球外物質”への未熟な対処は日本の未来をも厚い暗雲で覆っています。そして今、現実“コト”が起きた時、そのために私たちができることは、秋田の子どもたちと同じく「電気をこまめに切る」、「水道の蛇口をちゃんと閉める」ということとしかないと、そして「ハチドリの一滴」のよ

うな私たちのエコ行為が文字通り、全体の目標達成に向け、見事に機能している事実を目にしています。

“地球を自分のこととして受け入れる”、私たちが未来と繋がっていくために、まずは無力な自分を受け入れ、かつての日本人のように謙虚に、慎ましく生きる姿勢を取り戻す必要があるのではないのでしょうか。

(GALLERY 21 Curator/「エコビーイング」編集長)

編集後記に代えて 復興プラン：原発被災地・福島を「再生可能エネルギー革命」の拠点にせよ

茂木和行

行

今回の大震災は、脱原発そして再生可能エネルギーへの大規模な転換に向けた千載一遇のチャンスなのではないでしょうか。あくまでラフ・スケッチですが、以下のような復興プランを提案したいと思います。

まずは、実質的に避難させられた30キロ圏の方々のすべての住居に太陽光パネルを設置し、所有車を電気自動車やハイブリッド車へと転換します。次に、津波と地震で壊滅した沿岸の人たちの再建住宅にもすべて太陽光パネルを設置、購入する車も電気自動車とハイブリッド車に限定します。そして、30キロ圏と被災地全体を、大規模なスマートグリッド実験エリアに指定します。原発廃炉跡地は、十分な放射線遮断措置を講じたあとに被災のメモリアルを構築し、その周辺を太陽光パネルと風力発電の風車で埋め尽くします。こうして、原発事故現場を中心とし、避難エリア、震災被災地を結んだ「再生可能エネルギーの拠点」ができあがります。

原発廃炉跡地には、あらゆる企業集団が資金を出し合って、地熱発電なども含めた「再生可能エネルギー総合研究所」を設立し、太陽光パネルや風車を生産する大規模な工場も作ります。さらに、この研究所に「潮力発電」の本格的な研究体制を整え、最終的には「津波発電」の完成を目指します。これまでは津波は天災でしたが、これを逆に「天啓」へと変えてしまおうというのが「津波発電」の構想です。「津波発電」を単なる大ボラに終わらせないために、科学者・技術者の英知が結集されます。巨大容量の蓄電器と蓄電システムの開発も不可欠でしょう。世界全体をスマートグリッドでつなげば、各地の大津波による発電エネルギーは、世界の隅々に供給・蓄電されることになるのです。この復興プランは、被災地の復旧、経済の浮揚、雇用の創出、未来技術の創造、を実現しながら、地球全体を「再生可能エネルギー社会」へ導く絵図になると確信しています。もちろん、海野和二郎先生のソーラーポンド・モデルによる太陽熱発電（「教育改革通信」151号参照）もこの計画に入っています。

冒頭の「子どもたちのために脱原発による復興を！」を寄せられた佐々木聖さんが、「自民党にも比較的まともな政治家がいることがわかりました」と、衆議院議員の河野太郎さんのブログ「再生可能

エネルギー100%を目指す」を紹介してくれました。

「政治主導で2050年に再生可能エネルギー 100 %を目指し、そのための合意形成やルール作り、そして技術開発を進めるべきだ」という内容です。日本の再生可能エネルギーへの転換が遅れている理由として河野さんは、「経産省と電力会社、与野党の原発族の誤った政策」にある、と明確に述べています。

(<http://www.taro.org/2011/03/post-970.php>)

寄稿者の常連である石川雅章さんが、福島原発事故の遠因を日本的体質に求めた一文「権威主義の末路」を、ご自身のHPで紹介しています。一読の価値あり、です。

(<http://treeware.jp-help.net/pro-mogi/kenn-i01.htm>)

(編集 茂木)